

2021年1月30日

(2021)

令和3年度聖路加国際大学大学院

看護学研究科修士論文

題目

ろう妊婦の出産に向けた準備の体験

The Experience Preparing for Delivery of
Deaf Pregnant People in Japan

18MW001

飯島聖香

要旨

1. 背景

全国には約 34 万人の聴覚障害者がいる。聴覚障害については、その病態や発生時期、聴覚の程度により様々な様相を呈しており、人々の生活に大きな影響を与える。聴覚障害者のうちのろう者について、助産師が寄り添った援助をするためには、彼女らの生の声を聴き、状況を理解する必要があると述べられているが、ろう妊婦の体験を記述したものはほとんどない。

2. 目的

ろう妊婦が、妊娠中にどのように出産に向けての準備をしているのかを明らかにする。

3. 方法

本研究のデザインは、半構造化面接を用いた質的記述的研究である。日本手話を使用しており、妊娠出産産褥早期の経験があるろう者で最後の出産から 5 年以内の方を対象とした。面接は対象者の希望に応じて、個人面接とグループ面接を選択していただき、面接時の言語は、筆談か手話音声通訳で行った。分析は、木下(2020)を参考にした。本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会（倫理審査番号 19-A012）の承認を得て実施した。

4. 結果

日本手話を使用する、30 代の初産婦 2 名、経産婦 4 名の計 6 名の方にインタビューを実施した。ろう妊婦は、《胎児の成長を確認する》ことや、胎児を《育てる想像》から、【胎児の存在を感じ未来を想像する】ことをしていた。自分の妊娠出産の具合を探り確かめる【身体に向き合い妊娠出産の具合を探り確かめる】ことや、《相手を見て読む》ことと、文字を書いたり、身振り手振りを使用するなど、【相手を見て読み身体を使って話す】ことや、通訳を自分に合うように工夫して使用する《通訳の調整》や、出産施設の設備や施設内の物ごとを、それらの目的通りではなく、自分の使いやすいように工夫して使う《施設の工夫使用》や、対面的に物事がすすめられるように人や物を手配する《対面対話するための切り盛り》を自分に合うように総動員して工夫する【切り盛り経験を工夫する】ことで【持ち前の力で妊娠出産を遂げる】ことをしていた。この持ち前の力で妊娠出産を遂げることは、2 人目や 3 人目を妊娠して出産に向けて準備をする時に、【妊娠出産の経験を活かす】ことへとつながっていた。

5. 結論

ろう妊婦の出産に向けた準備のプロセスは、【胎児の存在を感じ未来を想像する】ことをしながら、【相手を見て読み身体を使って話す】【切り盛り経験を工夫する】【妊娠出産の経験を活かす】というろう者としての経験をもって、【身体に向き合い妊娠出産の具合を探り確かめる】ことで【持ち前の力で妊娠出産を遂げる】プロセスであった。